

戸川幸夫動物文学全集
4

講談社

戸川幸夫動物文学全集4 巨鯨の海ほか

昭和五十一年八月十八日 第一刷

昭和五十二年二月二十四日 第二刷

著者 戸川幸夫

装幀者 辻村益朗

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁二一 郵便番号一二二
電話東京(〇三)九四五一一二(大代表) 振替東

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

©戸川幸夫 一九七六年 Printed in Japan

目次

巨鯨の海	5	悲しき絶叫	126
カジヤード	174	群	150
秋田犬物語	213	吾妻の白猿神	192
忠犬像紳士録	255	三里番屋	233
名人ハブ源の左足	313	狂い角	278
尾崎秀樹	345	飛翔	290
		尾のないライオン	324

巨鯨の海

怒れる海

海は怒っていた。

激しい風は海の顔を逆なでにして、海神をひどく焦らだたせ、憤慨させていた。

大きなうねりや、小さなもり上りの頂からは烈風にひきちぎられた波しぶきが高く高く立ち上り、それが合流して白い煙幕となって洋上を覆い、雲のように海面をかすめて飛び去ってゆく。一つの煙幕の後に、次の煙幕が続いて、絶えることがない。

時には波しぶきは風の気まぐれに使噓されて大空に向けて挑みかかり、叩きつけてくる雨と闘った。

空は墨色で満たされていた。しかし、息のつまりそうなその暗さの中にも明暗はあって、濃淡の雲がおどろくほどの速さで東北に向って流れていた。黒い雲、ねずみ色の雲、鉛色の雲、そしてぶきみないぶし銀の雲が入り混って、先を争って走りつづける。

ほのかに、希望をもたせる明るさが水平線にだけ残って

いて、そこだけは白い線となって天地の暗さを区切っていた。

白い線は、ただし平らな直線ではなかった。海面に腹ばおうとする雲の流れと、絶えず盛り上って大空に反抗の牙をむき出している波濤とによってぎざぎざの醜い線となっていた。

その醜い水平線をつくり出しているのは、よく見ると風や波のせいばかりではなかった。

いまこの嵐の海の中を大小無数の鯨の群が波濤に逆らつて東から西に移動していて、それたちが大うねりの上に飛び上り、背鰭や尾鰭をしきりとばたつかせていたからでもあった。

鯨たちは抹香鯨の大群で、北太平洋からまっすぐに南下してきて、この中部太平洋、くわしく言うならば東経百六十度、北緯三十二度の海域で右に方向を転換したところだった。

荒海に育った鯨たちには吼える海も、叩きつける豪雨も烈風も、単なるレクリエーションの場でしかなかった。

鯨たちは海の荒らしを楽しむかのように、躍り、跳ね、潜り、泳ぎ、そして嵐に負けない大きな鼻音をたてて潮を高く吹き上げていた。

こうした嵐の日には怖ろしい捕鯨船も、鯨の群も襲ってこないことを彼らはよく知っていた。だから底ぬけにぶさけ合えるのだった。

波しぶきで、その数を読みとることはできなかったが、鯨たちはこの広い荒海一面にひろがって遊弋している。それから察しても、三百や四百以上の大群であろうと思われる。

鯨たちは雑然とひろがって、思い思いに遊びたわむれているように見えたが、そうでもなかった。彼らはいくつかのグループに分れていて、そのグループが集合して、この大群をつくり上げているのだった。

各グループには、それを率いる五十フィートを越す牡の鯨がいた。こうした牡鯨のことを人間たちはボスと呼んだ。

ボスがグループの者たちから信頼されるには勇者でなければならなかった。たしかに今この海域を遊弋しているボスたちは、その資格を充分に備えていた。彼の口のまわりにつけられた大鳥賊の吸盤の痕跡——それは彼に捕えられて喰われようとする大鳥賊の必死の抵抗を示すものであったが、それだとか鯨のためにつけられた皮膚の烈け傷、仲間の牡鯨との闘争の際の突き傷、これら幾多の傷痕が將軍の胸間に飾られた勲章のように、彼の戦功を誇っているのだった。

嵐は三日目にやんだ。そして久しぶりに真赤な夕陽が、まだ大きなうねりの余喘を残している海洋に、血のような滴りを落しながら沈もうとしていた。

そのころ鯨たちは、幾分、東に移動していたが、さして急ぐ旅でもないので悠々として浮遊していた。

いまは冬であった。だから抹香たちは寒い冬の間を南の温かい海域で過そうとしていた。

春の足音が近づいてくると、彼らは本能の指示に従って、北回歸線沿いに南島島とマリアナ諸島に近づいてゆく。それからさらに琉球列島を目指し、そこから北に転針して日本列島につっかけ、日本の太平洋岸を北上して夏には金華山沖から北海道、千島列島の涼しい水域に遊ぶ——そうした回遊性をもった集団であった。

なぜ彼らがそうしたジブシーの旅を続けなければならぬいか？ それは水温が彼らの肉体に適さないからだ、という理由ばかりではなかった。むしろそれよりも大きな理由は採餌の問題だった。

長須鯨や背美鯨のような鬚鯨類はアミのような小さな甲殻類を食餌としており、抹香のような齒鯨は鳥賊や章魚などの軟体動物を好んで食べたから、彼らの移動はこれらの餌の移動と重大な関係があった。

海流は一定の水温を保って、広い海の中を川のように流れてゆく。海は一見平均してなだらかなように見えても、そこには人間の眼で捉えることのできないさまざまな変化があつて、平均値を出しているのではなかった。従つて生物たちは自分に適した水温——つまり海流につて生活しなければならぬ。鳥賊たちも大自然が与えた掟を破るこ

とはできない。鯨だつてそうだった。

移動する軟体動物を追つて抹香たちも移動する。そのコースは一年かかつて一つの環を完成させた。この環を人間たちは回遊圏と呼び、その中に含まれる海域をテリトリイ（領域）と呼んだ。

世界の鯨学者たちは広い太平洋の中にはこうした抹香鯨のテリトリイが少なくとも五つは存在していると言っている。

果して五つのテリトリイがあるのか、その当否は別としても、確かにいまここに遊弋している抹香鯨たちは未だかつて国際日付変更線を越えて東のハワイ諸島へは近づこうとしなかった。それと同じように赤道を越えて南太平洋に侵入しようとしなかった。それは海流が創り出したテリトリイと言えるかもしれない。

テリトリイの向うにはまた別のグループのテリトリイがあつて、互いに牽制しあつていたが、犯しもしないかわりに犯されもしないといった掟を厳然と守っていた。しかも、それは人間の世界と同様に、勢力の均衡が保たれている間の見せかけの平和であつて、一度なにかの理由で——たとえば鯨や捕鯨船の襲撃で——一方の群の勢力が著しく崩れた場合にはたちまちに侵略が行なわれるのだった。猛々しい野性の世界では、力の侵略や支配は、生き榮えてゆくという自然の法則に従っているのだから正義であり、道徳であつた。

さて——この抹香鯨の大群は、天候がおさまつて視界が利くようになつてみると想像したよりもはるかに強大なものであつた。群の数は六百頭に達しているであろう。夕焼けの海のいたるところで鯨たちの水煙が勇ましく立ち上つていた。

鯨の潮吹きといわれるこの現象は、彼らが海水を飲みこんで吐きだすためではなく、また彼らの息が寒冷な大氣にあつて生ずるものでもない。鯨たちが頭の上に持つ鼻孔のくぼみに入りこんだ海水が、強力な排氣によって霧吹き状態となつて噴出されるものであつた。鯨たちの鼻孔は、種類によつてそれぞれ形や大きさや角度が異つてゐる。従つて高く立ちのぼる潮にも種類によつて形や大きさや、角度が違つてゐた。あるものは頭上にまっ直ぐ立ちのぼり、あるものは前傾した。一本のものもあれば、頂上で噴水のように二つに分れるものもあつた。殆ど潮吹きの現象を示さないものもあつた。

落陽は、大きくふくらみ、まさに沈もうとして赤い光を投げかけていた。その光をうけて抹香鯨たちが斜め前方四十五度の角度に吹き上げる潮は、あかあかと反射して、火を噴いているように美しかった。

抹香鯨たちの大群が遊弋しているこの海域はアメリカから日本への定期航路にあたつていて、はるか彼方の、もう紺色に暗くなりかかった水平線のあたりに一筋の煤煙が見えはじめた。

その船は船体を白く塗った美しいアメリカの客船で大勢の客が乗っていた。船体も、鯨の潮と同じように夕陽をはねかえして、ピンク色に輝いていた。

上甲板でデッキゴルフを楽しんでいたアメリカ人のグループの一人が、自分の順番を待つ間に眼を細めて落陽の海面を眺めていたが、ふっと気づいて、

「おい、あれは何だ？」

と仲間呼びかけた。とんきように聞える彼の叫びに、ほかの連中もゲームを捨ててびっくりして集まってきた。

「ほら、あの太陽が沈んでゆく辺りだが……」

青年が指さす海面は、湯が沸き立っているように赤い水煙が林立している。

「鯨のようよ……」

と若い婦人客が、青年の腕に頬を寄せて言った。

「まさか……」

青年には、常識で考えられないことだったらしい。

「あんなに鯨が集まってるなんて……」

「だって鯨以外に考えられないわ。海底噴火ならあんなに穏かじゃないでしょう。イルカとも違うわ」

二人とも自説をまげずに言い合った。言い合いながらも二人の間には特別に親しげな感情が溢れていたから、他の連中にもやにや笑いをうかべて敢てとめようとしなかった。

「ねえ君たち、船長にたずねるのが早道だよ」

グループの一人が口を挟んだので、二人はそうすることにして船長室に続く操舵室への階段を駆け登っていった。操舵室では肥った船長が特大の双眼鏡を眼にあててじつと前方を睨んでいるところだった。

彼は息を切らせて入ってきた若い二人の一等船客にちょつとびっくりした様子だったが、すぐに一流客船の船長としての威厳と愛想とをとり戻して、

「何の御用でしょうか？」

と微笑でたずねた。

「失礼します。船長さん、向うの水平線のところにたくさん何か泳いでいるようですけど……鯨ですわね」

「海豚でしょうか？」

二人は同時に質問した。船長は双眼鏡を婦人客に手渡しながら、

「まあこれで見てごらんさい。すばらしいショウですよ」

双眼鏡を眼にあてた娘は、

「おう……」

と言っただけで声を吞んだ。初めて見る確かにすばらしい鯨群。彼女は自分が賭けに勝ったのだという喜びを感じずる前に、その景観に魅了されて茫然となってしまうた。

「どう……やはり鯨？」

青年はのぞきこんだが、娘は答えない。答えることも忘れていた。

「鯨ですよ、抹香鯨の大群です。抹香鯨の群では二、三十頭というのが普通で、稀に百頭ぐらい一緒に揃っているのを見ることはありますが、しかしこんなにかたまっているのは私の永い船乗り生活の中でも初めてのことでですよ」船長が代って答えた。

「どれ、貸してごらん」

賭けに負け青年は、もどかしげに娘から双眼鏡をうけとって、一目みて、ひゃあッ！と叫び声を挙げた。

「こいつあ、凄いッ。これだけでこの船に乗った甲斐があった。」

グレイス、僕は写してくるからね」

青年は双眼鏡を返すと勢よく飛び出して行った。

「たしかにこのすばらしい景観はカメラにおさめる価値は充分にあります。だけど美しいお嬢さんを置いてきぼりにするには小さすぎると思うんですがね」

船長は娘に同情してユーモラスな口調で言った。だが娘はむしろそれを誇らしげに、

「いいえ、彼はカメラマンですの……。U・S通信社のビヤードという名をお聞きになったことありません？」

船長はややたじたとして、

「そうですか……それなら当然ですな。失礼だがお二人は……」

「来月日本で結婚するんです。両親が東京に居ますので……」

「そうですか……いや、それはお目出とう。それならば幸福の門出のお祝いにあの鯨の写真の傑作が生れるように協力しなければなりません」船長はにつこり笑ってフルスピードで鯨群に追いつくように命令した。

春であつた。だがオホーツク海の春はまだ浅い。

半月ほど前まで海岸線に、びっしりと張りつめていた流水は、ようやく今までのがみついていた手を放して、沖合はるかに去っていったとはいへ、流水そのものが溶け去ったのではなかった。流水の群は長い長い帯となつてどす黒いオホーツク海を北から南に向つてゆつくりと流れているのだつた。

氷盤の上には海馬や海豹が乗つてかすれたような奇妙な吼え声を挙げている。

小型捕鯨船の第一朔風丸はその氷帯に沿つて南下していた。正面には、まだ厚く雪に閉ざされた知床半島の山々が、いぶし銀のように光っている。

機関長の房太郎は後甲板の炊事場にきてストーブの火の具合をちよいとのぞいてから、

「政吉い、そろそろ飯の支度しろや」

と怒鳴つた。御飯焚きさんと呼ばれる政吉は、船員部屋の暗い狭くらしい寝台の上に毛布にくるまっていた

が、再三呼びかける房太郎の声にチュッと舌うちして、

「うるせえなあ、年中、鯨みてえに腹すかしてけつかる」と悪態をついたものの、のっそりと起上つて天井板をはね上げた。船員部屋の上は溜り場になっていて、寒い時だの雨や雪の日には船員たちはここにしゃがみこんで飯を喰うことにしている。

ぬっと顔を出した政吉に、房太郎は、

「飯だよ……鯨がさっぱり現われねえもんで腹ばかり減つて仕方がねえや」

と、吐きだすように言った。

鯨が出ねえのをまるで俺のせいのように言いやがる——と政吉は腹の中でばやいたが、相手が機関長とあつては正面きつて言いもしなはず、はい……と気のない返事で、ズボンを引き上げて上つてきた。

外はストーブの熱のこもった船員部屋とちがつて身を切るように冷たかった。

政吉は思わずぶると身ぶるいして大きくさめを立て続けにした。

第一朔風丸は四十トンほどの小さな木造捕鯨船なので、船長であり、同時に船主でもある耕造を加えて七人しか乗り組んでいない。砲手の由三、砲手見習いの鉄五郎、見張りの弥作と友造それに房太郎と政吉で、弥作と鉄五郎はアイヌだった。

港にあるときは船長がもちろん上の位にあるのだが、い

ったん捕鯨に出航するとすべての采配をふるうのは砲手の由三だった。見張り役も、操舵係りの船長も、機関長も、その他の者も砲手の命令通りに動かねばならないことになっている。それがこの社会での不文律で、飯を食うのも寝室に入るのも砲手が一番先であつた。

政吉のやらされている御飯焚き——つまり炊事係りは捕鯨船の中では最も低い地位にあつて、誰からも軽く見られた。しかし、一人前の捕鯨船員になるためには、通らなければならぬ修行の関門で、俗に、飯焚き三年の苦勞を経なければ捕鯨船のことはわからないといわれていた。

函館の町で、やくざ連に袋叩きにあつて危く簀巻きにされかけていた生意氣盛りの政吉を話をつけてひきとり、行く先のないままに御飯焚きに使つてやつたのは耕造だった。だから本当なら、政吉は、耕造に感謝しなければならぬはずだが、不平満々で、こんなことをさせやがつて……といつもぼやいていた。

飯ができ上つた。ほかほかと飯と汁の湯気が立ち上るのが待ちかねて、ぐうぐうとさつきから腹を鳴らしていた機関長の房太郎が、

「おい、砲手さん、船長う、飯だッ、飯がでけたぜエ！」と触れまわった。

飯がよそわれ、汁がづがれた。

砲手の由三は、これでよく狙いがつけられるものだと思えるほどの斜視で、いつも怒つたように無口な男だった。

彼はストーブの傍の暖かい甲板にどつかと腰を下してもぞもぞと飯を食いはじめた。

そこへ船長の耕造が降りてきて、

「由さん、この新聞を見たかね？」

と一枚の古新聞を差し出した。もう一と月以上も前の古新聞で、この船が室蘭の港を出るときに一人娘のやす子ができき煙草を包んで手渡したものだ。

今朝、煙草を使いはたして捨てようとしてなに気なくひろげてみると、物凄く抹香鯨の大群の写真が掲載されていて、耕造はびっくりしたのだ。

商売がら彼はむさぼるように写真につけられた説明書きを見た。説明は至極かんたんで、中部太平洋でU・S通信社のビヤード・カメラマンが撮影したものだといった程度のことを書いてあるだけだった。

「うーん、凄えや……」

耕造は唸ってしばらく口惜しそうに眺めたあとで由三のところへ持ってきたのだ。

「ほう、抹香だね」

由三は文盲なので写真しかわからない。ぶすつとした言い方をした。

「抹香だよ。凄くじゃないか……少なくとも六百頭はいたと書いてあるが六百頭なんてとても考えられない」

「親方、六百頭もいたら噴火湾なんか鯨で埋まっちゃうね」

見張りの弥作が言った。

「そらそうだ」

「どこだね、場所は？」

由三が眼を光らせてたずねた。

「中部太平洋とだけしきや書いてねえが……」

「中部太平洋といえはハワイの辺りかね？」

友造が口を挟んだが、誰も返事しない。

「せめてこの十分の一、いや二十分の一でもいい、ここにいやあがつたらなア」

機関長が間をつなぐように言った。

「慣れないオホーツクより、噴火湾の方がよかつたんではないかな……」

弥作が言いかけるのを耕造が慌てて眼顔でとめた。オホーツク海に出漁してみようと言いだしたのは由三だった。旧式の（といっても大正の末年ごろまではみんなこの式だった）レシブロエンジンつきの捕鯨船ではスピードを出すために莫大な量の石炭を消費させねばならない。そのために煙突は太くて高いのが特徴で、遠くから見ても一目で捕鯨船とわかった。噴火湾を活動の舞台としていた耕造には、費用のかかるオホーツク海への進出はあまり気のりがしなかったが、由三は解氷期のオホーツクから根室海峡にかけて夥しい鯨群が集まると聞くと、砲手としての野心から行ってみたいと矢も楯もたまらなくなった。射って射って、射ちまくって、今までにつくっていた記録を大幅に破

りたい。そうした念願から耕造を説きふせてやってきたものの、案外の見込みはずれで、そのひげ目が彼を一そう機嫌わるくしていた。

由三の眼がきらつと光った。そのとき政吉が弥作に調子を合せて、

「そうさ、噴火湾なら、とつくに二頭や三頭は獲れてンベサ。それに……」

言葉が終らないうちに由三の汁椀が飛んで政吉の頬で音を立てて汁をまき散らした。

「うるせえッ、小僧！」

由三が立ち上って殴りかかろうとするのを耕造と房太郎、鉄五郎が必死になってとめに入った。

その頃――。

ビヤード氏によつて全世界の新聞に報道された抹香鯨の大群は、長い集団の列をつくつて、ゆっくりと琉球列島のはるか沖合を北上していた。彼らはあれからラドローニ諸島と南硫黄島との間を通り抜けて沖大東島に出て琉球沖にとりついたところだった。

彼らが嵐の海で……或は夕焼けの海で、海域いっばいに拡がって餌をあさり、遊びたわむれていたときは群の構造は判然としていなかったが、いまこうして移動する姿を見わたすと五つのグループが合体した大集団であることがは

つきりした。

先頭の群が一番大きくて、堂々としていた。その群は二百五十頭に近い集団で、それを率いるボスも全群の中で最も雄大で、七十フィートを越える老いたる牡獣だった。

その一団が通りすぎた後にはちよつと水路が開いた。そして六十フィートほどの牡獣に率いられた百五十頭ばかりの第二集団が続いた。

第三集団と第四集団はそれぞれ七、八十頭の群で、いちばん後から四十頭ほどの群が追っかけていった。

集団は成熟した牡獣と、その牝にくっついて仔獣たちとから形成されていて、各集団はたった一頭の成熟した牡獣によつて護られていた。人間はこうした集団を後宮と呼んでいるが、鯨仲間のすべてが後宮を作るのではない。長須鯨や背美鯨といった鬚鯨類は一夫一婦の制度を極めて几帳面に守り、抹香鯨のような齒鯨類が一夫多妻制を採っているのだった。

後宮には幼獣以外の牡獣が加わることを許されなかった。甘ったれの乳呑み子から、殆ど母親に近い体長にまで成長した三歳仔までが、後宮に遊ぶことを認められていたが、その三歳仔は、まだ彼の睾丸に精虫をつくる能力がないという条件つきで許されているものだった。鯨児が四歳になつて春を感じはじめになると、その息吹きや体臭から、いやもつと敏感な鯨独特の探知法でボスに悟られ、これ以上その仔を後宮に置くことが群の平和を乱すも

のとして追放されるのだ。こうした社会構造は猿のそれに似ていた。一方は山、一方は海、なんら関連のないように考えられる二種類の野生動物が同じような社会を持つということは不思議であつたが、大自然が生物に、種の保存のための最良の掟として訓えたのだと看れば納得のゆくことかもしれない。

ボス鯨たちは、いずれもその地位を獲得するために生命がけで闘ってきた連中だつた。そして、今はその地位をいつまでも保持してゆくために少しの油断もできない連中でもあつた。後宮にいる仔獣たちはどれもがボスが産ませた腹ちがいの兄妹たちであつたが、後宮の平和を保つために父親はニキビ面になりかけた息子たちを追放するのだ。禍根を残さないというのがボスたちに与えられた伝統的な精神であつて、この場合、同情や愛情や庇い合いといったことは禁物であつた。

この五つの集団を統べているのは先頭を切つて泳いでいる老王であつた。ボスたちは、大統領に率いられた閣僚のように、順位に従つてついてゆく。老王が健在である限り、この大集団に混乱が起きることはなさそうであつた。

ところで老王の率いる第一集団の中に、牝獣としてはおそらく最大な部類に属するであろうと思われる五十フィートを超える牝がいた。彼女の皮膚は艶々ともめりがあつて、女盛りであることを示していた。

彼女は老王の仔を姪なまつていた。もちろん、他にも老王の

種を宿している牝獣たちがかなり居たが、この牝獣の腹部は他の牝たちとは比べものにならないほど大きくて横ひろがりにふくらんでいた。

抹香鯨たちの出産は三月から五月ごろにかけて行われるので十六ヵ月の妊娠期間を終えて身ふたつになる臨月腹の牝獣たちも多かったが、この牝獣は、どうしたわけかまだ十二ヵ月というのに臨月の連中よりも大きな腹をしていた。彼女の出産予定日は七月に入つてからだが、夏の出産という珍しい現象に符合するかのようになり、抹香鯨にはきわめて珍しい双生児を妊はらっているのだった。

愛の季節は目の前に迫つていた。鯨たちにとって出産の季節は同時に結婚の季節でもあつた。老王はやがて後宮が騒々しく、賑かになることを知つていて、彼女らが安心してすべてのいとなみに身をまかせられるような場所を捜し続けた。

三月、四月、五月と妊はらつた牝獣たちは乳くさい赤ン坊を産みつづけてゆくことだろう。同時に身軽な牝獣たちは熟した女の匂いをぶんぶんさせて、彼の愛を求めて身をすり寄せてくるであらう。

結婚と出産の多忙な日がくるのだ。身重な妻や、生れたての足弱な幼児をつれて強行軍はできない。荒い海や冷たい海流を避けて、しかも食事にこと欠かない場所。そして怖ろしい人間や鯨の群に気づかれないところというたと広大な海洋の中に在つても極く限られていた。

老王は陸地から遠ざかった。漂流物や、海鳥や、浮遊する油も陸地の接近を知らせるものとして警戒した。

老王は細心の注意をはらって群を率い、土佐沖から熊野灘の五百海里以上沖合をそろそろと北上していった。もつと陸に近づけば好物の鳥賊や鰯が多いことも知っていたが、この場合、安全第一の策をとるのが上分別だった。

彼は経験の浅い若い牡獣どもが、餌につられて無鉄砲に陸地に近づきすぎて、寒抹香として飢えた人間どもを喜ばせていることを百も承知していた。彼自身が若い修行時代に危く殺されかかった苦い体験をもっていた。打ちこまれた鰯と、潜水しようとした彼の背の角度とが、殆ど一直線になった時だったので鰯は老王の背鰭の一部を吹きとばしただけで助かったのだ。利口で、記憶のよい老王は二度と同じ失敗をくり返すまいと決心していた。

ところで熊野灘を過ぎたあたりから、例の二ツ児を姪っていた牝鯨の腹部が急にしほみはじめた。

それは、まことによく出来ている天の配慮からであって、彼女の子宮の中で蠢いていた二つの生命の一つに、突然に席をゆずるようにとの命令が下ったからであった。鯨のような巨大な動物は、その胎児もまた巨大であったから出産まで同時に二つの胎児を育てることは、母体にとって極めて危険なことであった。だから二つの生命の許容量が極限に達したとき、一方は消し去られなければならないから、鯨は流産という便利な排泄の方法を知らない代りに、

流産よりももっと合理的な処分の仕方を中心得ていた。いまこの牝鯨が行ったこと——急に腹がしほみだしたという現象がそれであった。彼女は死んだ胎児を体外に押し出すかわりに、とろかして子宮の壁の中に吸収していったのである。母体をすり減らして創りだした生命は、必要がなくなれば母体に還元してやる。それが何ものも喪わぬいもつともよい方法なのだ。

一つの生命が消えると残された生命が急に生き生きと輝きだした。競争に勝った胎児はのびのびと、広くなった子宮の中で手足を伸ばして成長していった。

そうはいくものの、こうした異常な解決法が母体にさわるらないわけはなかった。牝鯨には急にやつれが目立ち、動作がぶくぶくはじめた。

老王にとってこの牝鯨は一番の気に入りで、最も深く愛している妻であった。それだけに老王はひどく心配して、この若い妻の周辺につきまとうた。

後宮にたくさんの赤ん坊たちが殖えていった。そして出産の季節が一段落して、彼女の予定日の七月が過ぎていても、愛されている若妻はまだ赤ん坊を生み落とさなかった。

牝獣と、それにほぼ匹敵する仔獣、その仔獣の約五分の一が赤ん坊であるというのが、この時期の後宮の常識的な構成であった。だから、老王の第一集団には五十頭近い乳呑み子が生れていたことになるが、愛された妻の新しき生